

結核診療に異常事態 ～長引く咳きには気をつけましょう～

戦後の混乱期に蔓延した結核は、生命を脅かす疾患としての恐怖感と多くの悲劇を生み、国民的課題として取りあげられ、徹底したその対策がとられてきました。全国、津々浦々に国立病院、療養所が建設されたのも、その一環でした。

昭和23年、沖縄県で最初に開設された公立の結核療養所としての沖縄民政府公衆衛生部金武保養院は、昭和43年には結核単独の病院でありながら500床規模にまで増床されました。それでも患者を収容するに足りず、結核患者の本土療養のための送り出し事業が盛んに行われました。

昭和53年、金武町から移転し、現在地の宜野湾市に国立療養所が開設された当時も5個病棟、250床もの結核病床を有していました。

時代が大きく変わり、疾病構造にも変化が見られ、結核の時代から生活習慣病の時代の到来となりました。結核病床は漸次縮小され、現在1個病棟の50床で運営されておりますが、昨年度は、入院患者数が20人を割り込む一時期ありました。

結核診療は、保険診療上きわめて冷遇されており、一病床あたり年間約100万円の赤字を計上するため、病床利用率が50%を切る状況では病院運営が成り立たず、病床の縮小を検討せざるを得ない状況に直面しました。

しかし、最近、結核診療に異変が生じています。入院結核患者が常時35人程度あります。その特徴を挙げると、高齢者の結核、脳血管障害や糖尿病等の合併症を有する患者、種々の疾患でのステロイドホルモン使用中の患者、抗癌剤による治療中の極端に免疫能が抑制された患者に見られる結核の増加です。

国際化社会での外国人の持ち込む結核、エイズ合併の結核には注意が必要ですが、基本的には、結核に対する気のゆるみがあります。現代医療の課題とする「がん」とは対照的に、結核に対する危機感が薄れています。結核は決して過去の病気ではありません。長引く咳き、体重減少には気をつけましょう。早期に発見された結核は、短期間の治療で治癒がもたらされますが、油断は大敵です。

先人の築いた徹底した結核対策が功を奏し、減少の一途を辿ってきた結核が、撲滅されることなくすぶっている現状があります。今一度、結核感染をも意識した日常の健康管理に気を配りましょう。